

【成果概要】6-4. 気候変動による檜原湿原の生態系への影響調査

調査結果の概要

■ 平成30年度の成果

- 地下水位はまとまった降雨がなかった8月～11月にかけて徐々に低下する。一方、湿原内の水位は維持管理により水位が安定している。
- 現地調査の結果、湿原内への流入水は平常時、降雨時ともに表面よりも地下からの流入の寄与が大きい可能性がある。
- 植生の成立には、水面からの距離、地表面の高さ、地表の凹凸が寄与している可能性がある。また、湿原に安定して低茎湿性群落*1が成立することでハッチョウトンボ、モートンイトンボ、ベニイトンボ等が継続して生息していると考えられる。

■ 明らかとなった課題

- 流入量には、地下からの流入の寄与が大きい可能性があり、地下からの流入について把握する必要がある。
- 平常時は、湿原内の水位変動・流量が小さいため現地における測定誤差が大きく、調査手法を検討する必要がある。また、平常時、降雨時ともに年間を通じたデータの収集が必要である。
- 植生の成立には、水面からの距離、地表面の高さ、地表の凹凸が寄与しているため、植物の季節性を考慮し、周年を通して水位・地下水位の変動を把握する必要がある。

■ 平成31年度の調査計画

- ① 現地調査(降雨時の把握のため、8月まで実施)
- ② 気候変動による湿原の生物生息環境への影響解析
- ③ 土砂・栄養塩等のモデル構築
- ④ 気候変動による湿原環境の影響予測・評価
- ⑤ 適応策の検討

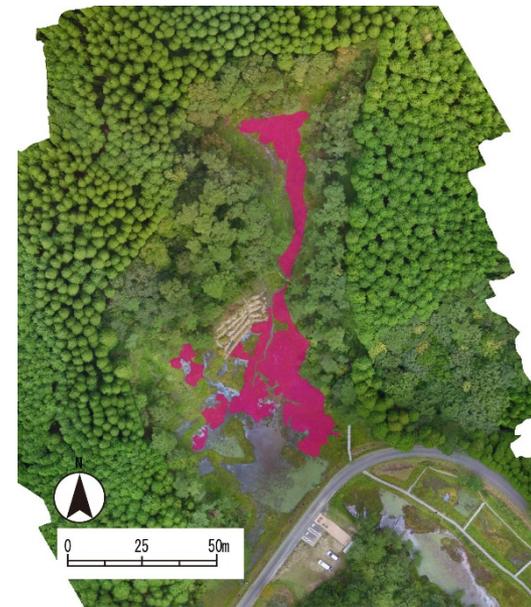


図. 低茎湿性群落(平成30年11月)

※1 草丈の低く湿潤な環境に成立する植物のまとまり